地図帳の怪（2）

――『万里の長城』はなぜ『ワンリー長城』になったのか――

明木茂夫

一、はじめに

論文『地図帳の怪――中国地名のカタカナ表記の功罪』[1]において、私は、カタカナ現地音主義によって表記された中国地名の問題点を論じた。その論旨は以下のとおりである。

昨今学校で使用されている社会科地図帳の中国地名は、基本的にカタカナ現地音表記が採用されており、漢字はカッコに入って小さく表示されている。おそらく、中国の地名は現地の中国語で発音するとおりにカタカナで表記しなければならない、漢字で表記して日本語の音読みで読むという従来の方法は廃止すべきである、という動きを受けてのことなのであろう。ただし、これらの表記には語学的な疑問点が多く、また地図によって表記が不統一であり、中国語の専門家でもただちにどこのことかを連想するのが困難なものになりはてている。そして、そのカタカナ化への異常なこだわりが、「ワンリー長城」（万里の長城）、「ター運河」（大運河）、「ウェイ川」（渭水）などの珍妙な表記をも生み出している。さらにこの地図帳巻末の地名索引が、このカタカナ読みで作成・配列されており、そのため索引が事実上索引として機能し得ないなど、はなはだ問題が多い。学校での教え方もまちまちで、普通の読みで教えている先生もあれば、カタカナ読みで教えている先生もあって、教育上も大変問題が多い。[2]

さてこの『地図帳の怪』（以下前稿と呼ぶ）を書いてから六年以上が経過した。私は当時、現行の地図帳のカタカナ地名の問題点を指摘し、その問題意識を心ある人々に共有して欲しいと願ったのみで、それ以上大袈裟（おおげさ）な批判を展開するつもりはなかった。しかし、幸いにもと言うべきか、前稿は私の仲間内から意外に大きな反響をいただいた。その多くは、まさかと思って家で子供の地図帳を見てみたら、本当にそうなっていて驚いた、自分たちが子供の頃にはこのような読み方で

教わった記憶は全くない、いつの間にこんなことになってしまったのか、といったもので、特に漢文や中国語の研究仲間からは、カタカナ現地音表記を肯定する意見は全く聞こえて来なかった。

ところで、「昔はカタカナでは習わなかった、いつのまにかカタカナになっている」という大方の感想にもかかわらず、実は地図帳のカタカナ地名表記は意外と古くから始まっている。それなのに我々の世代が、最近になって始まったかのような認識を持っているのはなぜなのだろう。実は私は、この点にこそこのカタカナ現地音表記の問題点が隠されているように思う。

さらに前稿を発表してから後、学生諸君にも彼らがどう習ったか、どう考えているかなど、機会をとらえて尋ねてみるようになった。漢文関係の授業では、受講した学生諸君に簡単なレポートを課して、自身の経験などを書いてもらったこともある。そうしたところ、彼らからはいくつか驚くべき話を聞くこととなったのである。

前稿では、敢えて現行の地図帳の表記のみに問題点を絞ったのであるが、仲間内の意見や、学生諸君の話を聞いていて、ここにはもっと大きな社会的問題があるように思えてきた。特に、こうしたカタカナ現地音表記がいつからどのように始まったのかという過去の経緯、そしてカタカナ現地音表記が教育や受験などにどのような影響を与えているのかという現代の社会的な現状については、ぜひともきちんと調べて一度整理しておかねばならないと思うに至った。

本来私は中国古典が専門であり、教育学や教育行政、国語国字問題などについてはずぶの素人である。ご専門の方々から見れば、何をいまさら、な部分は多いと思う。私の勉強不足や認識不足については専門の諸氏のご指導をあおぎつつ、漢文・中国語の立場から、そして教壇に立つ一教師の立場から、再度このカタカナ現地音について考え直してみようというのが、この続編の主旨である。

二、学生諸君の話から

まずここ最近の教育現場での中国地名の取り扱いについて、学生諸君がレポートに書いてくれたこと、私のところに話しに来てくれたことなどをご紹介したい。学校名や先生のお名前が特定されそうなところは、内容に影響しない範囲で書き換えながら、以下目についたままに書き出して行こう。

まずある学生のこの話にご注目いただきたい。

テストで「遼東半島」を「リャオトン半島」と書いたら×をもらった。正解は何ですかと質問したら、「リヤオトン半島」だとのことだった。

まさに悲劇！ 実に信じがたいことである。このようなことが教育現場で行われているのか！ 前稿でも触れたのだが、地図帳式のカタカナ現地音表記においては、直音の大きい「ヤ」と拗音の小さい「ャ」とが細かく区別される。要するに、「i介音」を有する音（斉歯呼）は大きい「ヤ」で、介音を有しない音（開口呼）は小さい「ャ」で表

記されることになっているのだ。遼東半島の「遼」の場合、「liao」でi介音を有する音なので、「リヤオ」と書き、「リャオ」と書いてはならない、と地図帳では規定しているのである。

確かにこの音の場合、「リヤオ」の方が若干中国語の発音に近い、ということは言えよう。しかし、「リャオ」と書けば間違いである、と言えるほどの区別であろうか？ 語学的には無意味なことだと言ってよい。どちらを書いてもかまわない、これは中国語を専門となさる方からはそれほど異論あるまい。

例えばこの音を「レアオ」と書く、という工夫だって実際に存在する。ああなるほど、確かにこれは「レアオ」とも聞こえる発音ですね、良い工夫ですね、とは言える。しかし、「レアオ」以外のカタカナを書いたら間違いだということには絶対になるまい。それと同じことではないのか？

そもそも「リヤオ」と「リャオ」の区別を丸暗記するくらいなら、他に勉強しなければならないことはたくさんあるはずである。これは所詮地図帳がたまたまそう決めた、という書き方に過ぎない。これを厳密に覚えても大した意味はないのである。それに中高の全ての地理の先生に中国語学の知識を要求できるはずもない。中国語の仕組みを知らない人に、必ず「リヤオ」と書くように要求すれば、これが「リ＋ヤオ」や「リヤ＋オ」で切れるような二音節以上の発音だと感じる可能性だってあるのである。「ヤ」と「ャ」に神経質になる先生がおられるのも、無理のないことだ。しかし、「リャオ」と書く方が、むしろ一字一音節であることが分かるというメリットがある、そのことも忘れてはならない。

いや、話はまだ終わらない。後述の平成六年版地名表記の手引き書では、今度は「リアオ」に変更されているのである！ 地図帳も、これに従って改訂するものが出始めている。[3] これでやっと大きい「ヤ」と小さい「ャ」の区別に悩まなくてもすむようになった、と言えるのだろうか？ いや、問題の本質は変わらない。今度は「リアオ」のみが正解、「リヤオ」も「リャオ」も×、という先生が出てくることだろう。もしも過去に「リアオ」と書いて×をもらった人がこの改訂の事実を知ったなら、あの時の×は何だったのかと割り切れない思いがするに違いない。それにしても、地図帳の表記が実にころころと変更されているものだとは、こうして調べてみるまで気づきもしなかった。

またこんなことを書いてくれた学生もいた。

暗記も好きで、地理も好きだった。授業では先生の口頭の説明を聞き、板書をノートした。だから先生の読みが音読みかカタカナ現地音かを意識していなかった。それまでは地理の成績はよかったのだが、中国の地名だけはなぜか覚えられなかった。原因はカタカナ現地音だった。

電子機器産業の盛んな「シェンチェン」と
機械産業の盛んな「シェンヤン」を
なかなか覚えられなくて困った。「シーチヤチョワン」の「ヤ」の大きさで誤答であるとされたことに激しい憤りを覚えた。漢字なら間違えたはずはないのに。

ああ、この学生も「シーチャ、チョワン」で×にされていたのだ。せっかく地理が好きだったのに、気の毒なことこの上ない。地図帳の表記はそこまで絶対的なものだととらえられているのか……。お断りしておくが、「ヤ」と「ャ」で×をもらった経験のある学生は、私の授業の受講者に限っても、二人や三人ではないのだ。いやそうなると、「シーチヤチョアン」と書いて×をもらった学生だって、日本のどこかにいそうな気がする。さらに最近の地図帳では、それがさらに「シーチアチョワン」に改訂されつつあるのだ（前掲の「リアオトン半島」と同様に）。混乱させるばかりで、大した意味があるとは思えないのだが……。

中学の時、先生にどうしてこんなカタカナで読まなければならないのか、そのまま漢字の音読みで読んではいけないのか、と質問した。そしたら先生は、教科書に書いてあるからそれが正しい、とのお答えだった。その先生も変だとは思っておられるようだが、自信がないため教科書通りに授業を進めているように感じた。

カタカナ地名を忘れたから、漢字で書いたら、それは間違いだと言われた。なぜ間違いなのか尋ねたら、無視され、口答えをするなとおこられた。理不尽だと思って親にも言ったら、先生が言うんだからそれが正しいと言われた。それ以来ずっともやもやしていましたが、先生（明木）の授業で救われました。

この話を聞いた時にはさすがに私も憤りを感じた。しかし冷静に考えると、先生方もこのようなカタカナに戸惑っておられたのではなかろうか。もちろん、生徒の質問を頭ごなしにはねつけた点は決してよしとはしないが、それを一方的に責めるのも先生方に気の毒な気がする。だって、システムとして無理がありますよ、こんなカタカナ……。

どちらの読みでもよいと先生はおっしゃっていたが、どうして二つ読み方があるのか疑問だった。

世界史の先生は、漢字読みとカタカナ読みとを両方教えていて、テストではどちらで書いてもよい、とおっしゃっていた。教科書にカタカナ読みがないものでも、先生自身が調べてきて、教科書にカタカナ読みを書き込むよう生徒に指導しておられた。というのも、大学受験でも徐々にカタカナ表記が始まっているからだ、とのことだった。〇六年（この学生の受験の年）より前から大学入試でもカタカナ表記の出題が始まっていたらしい。

もちろん受験勉強においては、覚えやすい方どちらで答えてもいいよ、という指導になるのは当然である。実際教科書や地図帳がそうなっているのだから、どちらかが正しく書いてあったらテストでは〇になるはずだ。しかしカタカナでなければならないとお考えの先生もおられることは、前述のごとくである。それに、そもそもなぜ読み方が二つあるのかという根本的な疑問については、学生諸君も敏感に感じ取っ

ていたようである。

地理の授業中先生が、地図の中国の有名な工業都市を赤ペンで囲ませた。先生は「こうしゅう」とおっしゃる。でもみんな地図に「こうしゅう」がみつからない。しびれを切らした先生は「コワンチョウって書いてあるところのことだよ！」とおっしゃった。

あはは、これはちょっとほほえましい話である。ただこの先生の弁護をしておくならば、先生は地図帳に「コワンチョウ」としか書いていないのに「こうしゅう」を探させたのではない、ということなのである。この学校がどの地図帳を採用していたかは定かではないが、現行の地図帳はいずれも基本的にカタカナ現地音表記をメインとして、その下に小さく漢字を添えている。ただ生徒諸君は大きなカタカナばかりに目が行って、下の小さな漢字を見落としたというだけのことなのである。もちろん高校生ならば「広州」という漢字は読めて当たり前。

中学の時の先生は、「現地の人はこう発音しているのだから、それを漢字のまま勝手に読むのはいけない。向こうには向こうの文化があるのだから、地名だってその文化に則って読みましょう。」と常々おっしゃっていた。その先生は、英語で日本人の名前を「名姓」の順で読むことにさえ、難色をしめされていた。しかしそのわりには、テストでは「漢字以外は認めない」、「ちょうこうやチャンチャンだと×にする」とおっしゃっていた。

この先生は日本語式に読んではならない、現地の発音に従って読まなければならない、というお考えに、それぞれの文化を重んずるという根拠を示しておられる点で、前述の頭ごなしに押さえつけた先生よりはしっかりと指導をなさっている。しかしそうした先生でさえも、中国地名のカタカナ化には疑問を感じておられるようだ。そして、相手の国の文化を重んじて現地読みすることと、中国の地名を日本の音読みで読むこととを、矛盾とみなしておられないようなのである。これはどう考えるべきか。実はこの点は拙稿の重要な論点とも関わることなので、後で詳しく述べることとしたい。

こんな感想を述べた学生もいた。

中学ではカタカナで覚えさせられた。高校で漢字と音読みを覚えさせられた。中学での苦労が無駄となった。

いや、気の毒なことである。この学生の場合のように、中学と高校で教え方が違っていたというのは偶然なのか、それともカタカナ化が進む過渡期にちょうど中高時代を過ごしたためなのか。では彼らの弟や妹の世代はどうなのだろう。

妹や弟の地図帳がカタカナになっているので、学校ではどう習っているのか尋ねたら、「ワンリー長城」に「ター運河」なんて聞

いたこともないと言っていた。「ワンリー長城」や「ター運河」は、地図帳の上だけでの特殊な表記のようだ。

弟に尋ねたら、「三峡ダム」は知らないが「サンシャダム」なら聞いたことがある、と言っていた。

弟の地理の教科書と地図帳では、すでにカタカナ化が進んでいる。驚くことに、地理の教科書（帝国書院）の方は、カタカナしか書いていない。かろうじて漢字になっているのは「黄河」と「長江」。でも、読みは「ホワンホー」と「チャンチャン」。

中学生の弟の問題集『教科書ワーク』では、カタカナで出題、正解もカタカナ。漢字は無し。自分が使っていたセンター入試の参考書は、みんな漢字だった。こんなのでよくわかるね、と弟に言ったら、弟は、何がわからないの？ とバカにしたように答えた。

高校三年の妹に聞いてみたら、教科書地図帳はカタカナだが、そのような使い方はしないということで、先生も日本語読みしているようだ。

どうも学校によってまちまちなようだ。ただ、最初からカタカナ地名だけを習って、それが普通になっている子供たちも現れているということは言えそうだ。もちろん現在各地の学校でどのように教えているのかについては、関係する公的文書や各学校での実態を広く調査しなければならないわけであるが、現在の私の能力では手に余る。これは今後の課題とさせていただき、さらにこれらの学生の話はあくまで個々の実例であって、これを普遍化させて考えるつもりはないことをお断りしておきたい。

ただ、後で触れる文部省による地名表記の指針に関する文献では、小中高で表記が一貫していることが望ましい、ゆえに全体をカタカナ表記で統一する、という考え方が示されている。しかしそのカタカナ化の導入のおかげで右のような不統一が生じているとすれば、これは何とも皮肉な話である。

またこういった表記の基準について、ある学生はこのように教えてくれた。

> 教科書の凡例を見てみると「本書における人名・地名・歴史用語などの表記は、できるだけ現地音に近づけました。国際化の時代に、現地の読み方に慣れておく必要があるからです。ただし、慣用的用法が固定しているものは、そちらを用いたものも多くあります。」と書いてあった。

なるほど、国際化とは便利な言い方である。現地の人にも「通じるように」とはさすがに書けなかったらしい。しかし、現地の読み方に「慣れておく」というのもやや言い訳じみている。「慣れる」程度の理由を盾に、教科書の表記をこんなにしてもよいものか。国際化の時代

だからこそまず母語を大切に、と言うことだってあるのである。これがどの教科書の凡例なのかを彼が書いてくれていなかったので、今のところその現物を見るには至っていないのだが。

それから、「慣用的用法が固定しているもの」というのは、例えば「北京（ペキン）」や「広東（カントン）」などのことだと思われるが、これらは非常に有名な地名、つまり話題に上る可能性の高い地名なのである。使用頻度の高い地名に限って慣用に従う、ということにするならば、現地音に慣れておくことにはむしろつながらないはずだ。そもそも、このカタカナ現地音を最初に作った人たちの意図は、本当に「現地の人の読み方に慣れる」、などということにあったのだろうか。これについても後で考察する。

さて、せっかくだからこの他にも、学生諸君によるカタカナ現地音に対するコメントをランダムに紹介したい。彼らの目の付け所もなかなか鋭いのである。

高校の頃はカタカナを見て、中国語ではこう読むのだなとぼんやり考えていた。しかし大学で第二外国語に中国語を選択したら、カタカナでは全く通用しないことが分かった。

実際に外国語を勉強すれば、カタカナ読みでは通じないことはすぐに分かる。「ホワットタイムイズイットナウ」をカタカナどおり読んでも通じないのと同じことだ。しかし心配なのは、彼が話してくれたように、一般の人がこのカタカナは中国語の発音に近い、と安易に考えはしないかという点なのである。

世界史の授業で、教科書の「毛沢東」には「モウタクトウ」とルビが振ってあるのに、先生は「マオタクトウ」と呼んでおられた。

失礼ながら、中国語には「マオたくとう」という読みは存在しない。苗字はカタカナ現地音で名前は音読み、という読み方は、湯桶読みでもなければ重箱読みでもない。何と呼べばよいのだろう。

「殷虚」「長安」は音読みのルビ、「洛陽」は音読みのルビにカタカナ現地音が加えてあった。これは、歴史上の地名・歴史用語は音読みという原則で、一方「洛陽」だけは現在も使っている地名であり、地名歴史用語と現代都市名とを兼ねているためカタカナ現地音も加えた、ということなのだろう。製作者側の「カタカナ現地音を使わなければならない」という半ば強迫めいた義務感と、なんとか一貫性を持たせようとする必死さが伝わるようである。

これはなかなか手厳しい。しかし、現代の地名と歴史上の地名でカタカナ現地音の適応を教科書が切り替えている、ということに気づいた彼の注意力はほめるべきだと思う。

歴史の教科書の列強による中国進出の話で、「広西地方」が「カンシー」地方となっていた。これは「コワンシー」と書くべきも

のだろう。多分「広東」を「カントン」と読むことに引きずられたのだと思う。

この学生は第二外国語に中国語を選択してくれているのだろうか。なかなか鋭い。

囲碁将棋に関する話で、「中国象棋や囲碁」と書いてあるところに、わざわざ「ちゅうごくシャンチー」や「いご」とルビが振ってあった。どういう基準でルビを振っているんだろう。

旅行用パンフレットの「中国貿易公司」に「ちゅうごくぼうえきこんす」とルビが振ってあった。なぜ「公司」だけ「こんす」？

いや、彼らの疑問も無理はない。「将棋」ではなく「象棋」だからこれは中国語だ、「会社」ではなく「公司」だからこれは中国語だ、ゆえにカタカナ現地音で読まなければならない、そのような判断があったのだろうか。ならばなぜ「中国」は「ちゅうごく」なのかとツッコミを入れたくもなる。これは教科書の例ではないが、他に「万元戸」に「ワンユエンフー」とルビを振っている例が実在する。

現地音で表記することは中国人に対する敬意だという意見も展開されるようだが、中途半端に現地音でカタカナ表記するほうがよほど失礼なのではないか。国際化というならば、自国以外の文化なり思想なりの知識を学校で教えるべきだろう。カタカナは必ずしもそれに当たらない。「ター運河」で覚えた子が、実際に「大運河」を目の前にした時、それが「ター運河」だととらえることができるのだろうか。

彼が指摘するのは、カタカナ現地音は必ずしも「知識」につながらないという点だ。この指摘には唸（うな）ってしまった。私も学生時代、万里の長城の西の端近くまで行ったことがある。砂漠の彼方に消えて行く万里の長城を眺め感涙にむせびながら、「これがワンリー長城だ」では全く以て様にならない。「大」という字には「おおきい」という意味があり、「万里」という字には「一万里ほども長い」という意味がある。カタカナ読みするとそれが抜け落ちる。このことは決して小さな問題ではないように思う。

地図帳はすべての地名に漢字とカタカナ現地音とが添えられていて、文字が多くなってとにかく見づらい。

「旅順」が「リューシュン」「リュイシュン」と不統一。

「右江」は「ヨウジャン」のはずなのに「ユウジャン」になっている。まさか、「you」を英語読みしたのでは？

中国の各省の名前とそれぞれの省都を一覧表にしたものを見つけ

た。そこには注釈があって、「フェ」の発音は、「え」を発音する口の形のまま「ふ」と言ってみると正しい発音になります、と書いてあった。先生これ、ほんとの話です。

「淮海路」は「ホァイハイルゥ」、「桃江路」は「タォジャンルゥ」となっていた。「ター運河」に合わせれば、「路」も漢字の方がよいのでは。逆にこちらに合わせるなら、「ター運河」ではなく「ターユンホー」となるのではないか。

日本側が中国の河川を、「ホワイ川」「シー川」「チュー川」と呼ぶのは、外国人が日本の地名を「Mt. FUJI」とか「SHINANO River」と呼ぶのと同じ感覚なのだろうか。もしも中国側が日本の地名を「FUJI Shan」とか「SHINANO He」とか呼んでいるのなら、おあいこだが。

みんなそれぞれ面白いところに目をつけてくれている。ここで、カタカナ現地音に賛成の意見も紹介しておくべきだろう。例えばこのようなコメントがあった。

中国の地名の漢字にはなじみのない字が多い。だからむしろテンポのあるカタカナで覚える方が効率的でよい。自分はカタカナで覚えるのに苦労はなかった。もちろん漢字で覚えさせられても問題はなかったとは思うが。しかし、せっかく覚えたカタカナが、語学的に間違いが多いとなると話は別だ。いままで苦労して覚えたカタカナは、なんだったのだろう？

彼はたまたまカタカナ主義の先生に教わり、それにうまくなじむことができたようだ。いや私も、中国語ではだいたいこんな風に読むんだ、ということを感じることができた点では、全部無駄だったと言うつもりは全くない。ただカタカナだけしか知らないということでは、後々社会に出て困るのではないかという心配はしている。

教科書を見たら、有名な地名や簡単な読みのものには中国語のルビが振ってあり、読みが難しいものには日本語読みのルビが振ってあることが分かった。地図帳も、授業中に使うのに見やすいように配慮してカタカナ表記にしているのだと思った。先生の主張も分かりますが、私は用途によって表記を変えるのはかまわないと思います。

見やすいように配慮してカタカナ現地音を採用することを認める意見である。ただひとつ申し上げるならば、私は表記を変えるなとはひと言も言っていない。前稿でも述べたように、中国語での読み方を表現するために現地音方式のカタカナを用いる、ということは我々でもしばしば行うのである。むしろ用途によって表記方法を選ぶべきだ、というのが私の主張である。そして、カタカナ現地音で教科書や地図帳を作るのはまずい、というのが私の言う「用途によって選ぶ」とい

うことなのである。一部のカタカナ現地音主義の人々は、「象棋（シャンチー）」や「万元戸（ワンユンフー）」の例から分かるように、中国の事物には有無を言わせず全てカタカナ現地音を用いようとなさっているように見える。こちらの方がよほど画一的だと言えはしないか。

それから、有名な地名や読みが簡単な地名はカタカナ現地音、読みが難しいものは日本語の音読み、という区別を用いている教科書があるのかどうか、私には定かでない。現行の教科書を通覧して確認できるのは、「カタカナ現地音」と「慣用として広く使用されているもの」、そして「主として民国以降」と「それより前」、という区別である。彼が具体的な書名を挙げてくれていないので、現在のところ確認するすべはない。

さらに、地理の教科書や地図帳以外で、学生諸君が気づいた例を挙げてみよう。

市販の地図でも出版社によって違いがある。江西が「チアンシー」となっているものと「チャンシー」となっているものがあった。

世界史教科書の「威海衛の戦い」が「ウェイハイウェイの戦い」になっていた。

日本史教科書で、「塘沽停戦協定」は「タンクーていせんきょうてい」なのに、「済南事件」は「さいなんじけん」となっていた。で、済南を地図で探してみたら、地図によって微妙に位置が違っていた。

進研模試は「カタカナ（漢字）」が基本のようだ。ただ「広西壮族自治区」は、「広西（コワンシー）」で「コワンシー」がカッコ入り、壮だけ「チョワン」とルビが付けてあった。なぜ不統一なのだろう。駿台模試では「シャン」と「シヤン」が混同されていた。

観光ガイドブックの類には、巻末に日本の漢字、日本語音読み、簡体字、ピンインの対応表がついており、声調や読み方の説明もついていた。これを地図帳にのせればよさそうだが、それでは地図帳の域を超えてしまう。

旅行用ガイドはその使用目的からやはりカタカナ現地音をつけている。ある旅行ガイドでは、「魯迅故居」に「ルーシュングージュイ」と書いてあった。しかし一部の本は、旅行ガイドでもカタカナ現地音無し。一方世界遺産を紹介する本を見てみたところ、普通に漢字と音読みだった。

『ポプラディア情報館　世界地理』（ポプラ社、二〇〇五年版）では、「天安門（ティエンアンメン）」「孫文（スンウェン）」「皇帝溥儀（こうていプーイー）」「華北（ホワペイ）」「四川盆地（スーチョワンぼんち）」「毛沢東（マオツォトン）」などとある。「一方

華北（かほく）」「華南（かなん）」の読みもあって、統一されていない。

『図説まんが　世界のくにぐに　第2巻アジア』（読売新聞社、一九八八）では、「ホワン川」「チャン川」「ワンリー・チャン・チョン（万里の長城）」となっていた。古い本の方がカタカナ現地音は少ないだろうと思っていたのに、意外だった。

『世界全地図・ライブアトラス』（講談社、一九九二）では「黄河」が「ホワン川」、「長江」が「チャン川」となっている。一方『世界大地図館・テクノアトラス』（小学館、一九九六）では「黄河」が「ホワン」、「長江」が「チャン」となっている。テムズ川を「テムズ」、セーヌ川を「セーヌ」、とするのと同じ感覚で、黄河を「黄」、長江を「長」としているらしい。

採点のアルバイトをした時、正解は「長江」、「ちょうこう」も可、となっていた。チャンチヤンという解答があったらどうすべきだったろう。

私一人の調査には自ずと限界がある。学生諸君がいろいろな例を調べてくれたおかげで、一般向けの世界地図、受験勉強、子供向け読み物、旅行ガイドブックなど、いろいろな方面にもさまざまな影響があることがよく分かった。私が最近気になっている例を挙げよう。これは実際に出題された公務員試験の過去問題で、『警察官・消防官スーパー過去問ゼミ　人文科学』[4]の「世界の諸地域」に掲載されている出題例である。

中国に関する次の記述のうち、下線部が正しいものはどれか。

中国東北部ではアンシャンの鉄鉱石やフーシュンの石炭などの鉱産資源が豊富であるが、ア石油は産出されていない。華北を流れる黄河が注ぎ込むのはイ東シナ海である。黄河にはウサンメンシャダムとサンシャダムが建設されている。農業地帯は年降水量が７５０～８００mmの境界線でエ春小麦地帯と冬小麦地帯に分かれる。内陸の西部に住むオウイグル族の多くはイスラム教徒である。

ご覧のとおり、地名やダム名はカタカナのみで漢字は無し。公務員試験を受けるには、これからはカタカナ現地音表記で覚えなければならないようだ。現実問題として学校での教え方がまちまちな状況があるのに、カタカナで出題することは公平性を欠きはしないか。だからと言ってカタカナの方で全国統一されてもまた困るのだが……。まさかカタカナ主義に従順に従う人間しか公務員に採用しない、と言うのではあるまい。さらに、この問題集には次のような解説が付されている。

サンメンシャダムは黄河に建設されたダム、サンシャダムは長江

に建設中のダムである。黄河には、昔から洪水と干ばつを繰り返す暴れ川であったので、治水のため、サンメンシャダム以外にもチントンシャダムやリウチヤシャダムなどが建設され、耕地が広がった。

お恥ずかしい話、私は最初この「チントンシャダム」というのがどこのことか、しばらく悩んでしまった。そんな口三味線（くちじゃみせん）みたいなダム、あったっけ？　しばらく呻吟した後、やっと気がついた。もしかして「青銅峡」のことか？　しかし、今の学生はこんなもので勉強しなければならないのか……。気の毒至極。

もう一つ、この問題文と解説文の記述にはよく見ると明らかな誤りがあるのだが、読者諸氏はお気づきだろうか。そう、「サンメンシャ」「サンシャ」「チントンシャ」「リウチヤシャ」は全て、大きな「ヤ」とすべきところを小さい「ャ」と書いているのだ（なのになぜか「チヤ」だけは大きい「ヤ」……）。やはり「ヤ」と「ャ」を区別させようというアイデア自体に無理があったのではなかろうか。

ああ、これから地理・現代社会などの分野の就職試験問題では、このような形で出題されるようになって行くのだろうか。それにしても、今後もしも、

次の中から中国の重工業都市を選べ。

①チョンチン　②チンチョウ　③ランチョウ

④チョンチョウ　⑤チョンツー

などという問題が普通に出されるようになったらと思うと、空恐ろしい。実のところ、私には正解にたどりつける自信が全くないからである。いや、昭和二十四年の国語審議会「中国地名・人名の書き方の表」にははっきりと、

中国の地名・人名は、かな書きにする。

中国の地名・人名のかな書きは、原則として現代の中国語標準音による。

当分の間、漢字をあわせ示してもさしつかえない。[5]（傍線明木）

と書いてあるのである。ご注目願いたい。漢字を併記してよいのは、昭和二十四年から「当分の間」だけなのである。そしてその「当分の間」の期限が切れた時、それは漢字無しのカタカナだけで全て表記される時である。私の心配はあながち杞憂ではないのかも知れない。

この節の最後に、あと二つだけ学生によるコメントを紹介しよう。

親の持っていた古い地図帳と今の地図帳を比べてみたら、「チョンツー」が「チョントゥー」に、「テンチン」が「ティエンチン」に変わっていた。

漢字と音読みで習った記憶がある。カタカナ現地音で習ったことはない。だから自分たちの使った教科書も地図帳もそうなっていたと思いこんでいた。で、本棚の奥から久しぶりに引っ張り出してみたら、なんと、自分たちが使っていたものもカタカナ現地音で表記されていたことを知って、愕然とした。

これは彼らだけではなく、我々の世代の人間も同様に感じることである。すなわち、地図帳の表記は時代によって細かく改訂されているらしいこと、そしてカタカナ現地音表記は最近始まったことではなく意外と古くから導入されているらしいこと、にもかかわらず我々自身はカタカナ現地音で習った記憶がないことである。次に我々が調べてみるべきは、こうした地名表記の歴史的経緯、すなわち過去の地図帳の表記の変遷、そしてその表記の指針となった文献である。

三、歴代地図帳の記述

さて、まず歴代地図帳の表記の変遷について。調査は、教科書研究センター附属教科書図書館[6]にて行った。ただし調査対象が各時代・各出版社の教科書・地図帳・指導書など膨大な範囲に渉るため、まだその極一部にしか調査が及んでいないことをあらかじめお詫びしておく。今回は帝国書院の高等学校用地図帳を中心に、同社の中学校用と小学校用、及び他社の地図帳も適宜参照しながら、特に問題となりそうな地名に絞ってとりあえずの中間報告をとりまとめたい。

この調査は、同一タイトルの地図帳や教科書の各年度の差異を細かく調べなければならない。同一タイトルにも初版年、発行年、検定年などのデータが複数あり、また見本用で、刊年等が空欄のものも所蔵されており、識別が難しい。そこで本稿では、教科書図書館の蔵書ラベルのデータを基準とすることにする。三段からなる蔵書ラベルの最下段の数字は、

「検定済年（使用開始年度）」

もしくは、

「検定済年／使用開始年度」

となっている。例えば「31（32）」は「昭和三十一年検定済、昭和三十二年度使用開始」であることを表し、また「H16／17」は「平成十六年検定済、平成十七年度使用開始」であることを表す。ここでは（　）と／とを特に区別せず、31／32、H16／17のように表記することとしたい。[7] 以下、例えば帝国書院刊行の二種類のタイトルについて、『標準高等地図―地図でよむ現代社会』H15／16を『標準』H15／16『新詳高等地図三訂版』31（32）を『新詳』31／32のごとく示すこととする。

さてでは、カタカナ現地音表記の抱える問題点を端的に表す例として何度も触れた、「ワンリー長城」と「ター運河」からまず調べてみよう。意外なこと（少なくとも私にとっては）に、「ワンリー長城」の表記は同図書館の開架閲覧室に配架されている帝国書院の最も古い高等学校用地図帳・『新詳』31／32において既に採用されていた。地図上の表記は、

ワンリー（万里）長城

となっており、漢字の「万里」はカッコ付きで添えられている。これは、そもそも地図帳にカタカナ現地音が採用された初期の段階で早くも用いられたものだと言える。つまり私が子供の頃に使ったはずの地図帳でも既にそうなっていたということなのだ。しかし、自分が教師になるまでそのことには全く気づかなかった。先生を含めて周りの大

人から「ワンリー長城」などという言葉を聞いたことさえなかった。

そしてこの表記は、（　）が［　］になるなどの細かいブレはあるものの、現行の地図帳まで一貫して用いられている。ちなみに、『標準』Ｈ６／７（図１）などでは、

ワンリー（万里）の長城

と、「の」が入っていた。また、かなり古い地図帳だが、地勢社の『高等新地図』28／29では、

ワンリーチャンチョン（万里長城）

という表記がなされている。日本書院の『高等地図六訂版』32／33では、

万里長城

とのみ。それが同社の『最新高等地図』『詳密高等地図』41／42では、

チャンチョン（万里長城）

となる（図２）。ただし、二宮書店の『基本地図帳』Ｈ14／15や『現代地図帳』Ｈ15／16が、

長城（万里の長城）

としているように、「万里長城」にカタカナ現地音表記を採用してこなかった地図帳も存在している（図３）。もっとも、この地図帳の「大運河」の方は「ター（大）運河」になっているのだが……。

中学校用の『中学校社会科地図』では29／30で、

ワンリー（万里）長城

が登場し（それまでは万里長城の記述自体がない）、翌年の『同　五訂版』30／31で一旦、

万里長城

となり、その後40／41から現行のものまで、

ワンリー（万里）長城

となっている。

一方小学校用はと言うと、『小学校社会科地図帳』29／30には万里の長城の名前が記されていない。31／32になって、

万里長城（バンリーチョウジョウ）

と出てくる。中学校用と違ってルビがついていることに注目されたい。そしてそれは『同　四訂版』35／36で、

万里の長城（ばんりのちょうじょう）

と変わり、その後『同　初訂版』48／49で、

ワンリー（万里）長城

となる。48／49以降は高校用と大差なくなったと言える。

ところが興味深いことに、小学校用は『同　最新』Ｈ３／４で、

万里の長城（ばんりのちょうじょう）

になるのである（図４）。つまり、小学校用に限り、平成三年から「万里の長城＝ばんりのちょうじょう」という「普通」の表記が復活しているのだ。

以上、高等学校用ではカタカナ現地音導入の当初から「ワンリー長城」という表記が（一部を除き）ほぼ一貫して採用されていた（中学校用もほぼそれに準ずる）、一方小学校用では平成に入ってから「万里の長城」の表記が復活している、ということが分かってきた。地名表記の手引き書などは、子供に分かりやすい表記を目指すと何度も述

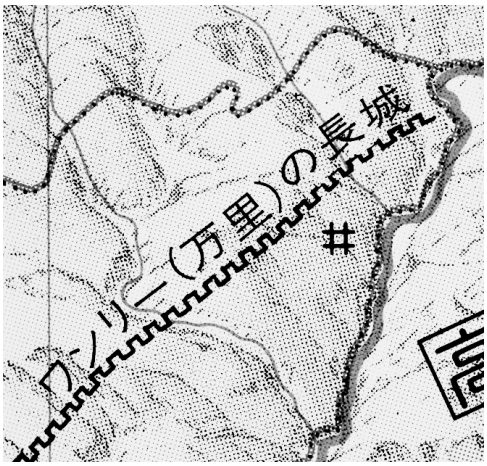
ワンリー(万里)の長城

図 1

(古北口)
(平泉)
クーペイコー
(万里長城)
チャンリー
カイロワン(開灤)
カイピン(開平)
チャンリー

図 2

(万里の長城)
ユイリン
榆林
長城
石炭

図 3

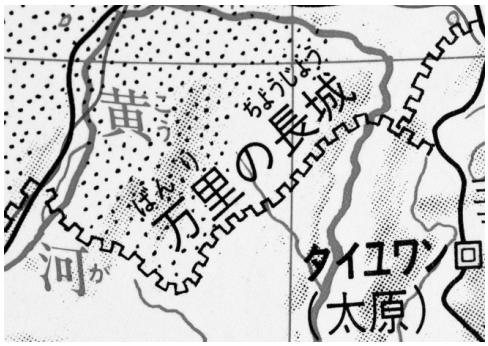
黄河
ばんり
ちょうじょう
万里の長城
タイユワン
(太原)

図 4

ペキン
(北京)
カイロワ
チョーシェン
(涿県)
テンチン
(天津)
ツェンシェン
(滄県)
省
軍
北
運河

図 5

べている。普通の読みが復活したという事実は、カタカナ現地音表記が小学生には分かりにくいということを地図帳側が認めた結果だと解釈してよいのだろうか。

では次に「ターー運河」について。見た目は「ワンリー長城」も「ターー運河」も、そのお間抜け度は似たようなものだが、その扱いはやや異なっている。当初は「大運河」のままだったのである。「ターー運河」の表記、正確には、

ターー（大）運河

の表記が登場するのは、『新詳』41／42からだ。つまり「ターー運河」は昭和四十一年に出現したということだ。(8)

他の出版社のもの、例えば日本書院の『高等地図六訂版』32／33では、

大運河

のまま。ところが同社『最新高等地図』『詳密高等地図』41／42では、

ターー（大）運河

となっている。奇しくも帝国書院と同じ年である。おまけに、41／42では他にもご丁寧に、

ナン（南）運河
ペイ（北）運河

の表記が一緒に並んでいる（図5）。まあこれについても、「北」と「南」が固有名詞だと言われると、違和感を否めない。

中学校用では29／30で、

大運河

が登場し（それまでは大運河の記述自体がない）、40／41ではなぜか、

ナン（南）運河

のみが顔を出し、46／47からは、

ターー（大）運河

となって現行のものに至る。

では小学校用を見てみると、実は小学校用地図帳には「ターー運河」の名前自体が見当らない。いやそれは単に、小学校用地図帳に大運河の名前まで示す必要はない、と判断されたということなのだろう。

次は「黄河」と「長江」について調べてみよう。結論から先に言うと、「ワンリー長城」とは違ってこれはそれこそ二転三転している。カタカナ化導入の初期、帝国書院の高等学校用『新詳』31／32では何と、

ホワン（黄）川
ヤンツー（揚子）川

だったのである。よく見ていただきたい。黄河については、

黄→ホワンというカタカナ現地音表記
河→川という漢字に変更

となっているのだ。前稿での私の懸念は、実は過去の地図帳において的中していたのである！ まさか本当にやっている地図があるとは思わなかった……。

長江については、「長江」ではなく「揚子江」という言い方に従った上で、

揚子→ヤンツーというカタカナ現地音表記

江↓川という漢字に変更

となっている。

当時この地図を作った人は大まじめだったことだろうが、どう見ても珍妙である。前稿の繰り返しになるが、まず中国の河川は「～河」であろうと「～江」であろうと「～水」であろうと、漢語の構造を無視して一律に「～川」としている点である。しかしこれは、地図帳が勝手に始めたことではないので、地図帳ばかりを責めるのは気の毒かも知れない。と言うのは、前掲の昭和二十四年国語審議会建議「中国地名・人名の書き方の表」[9]には、はっきりと、

ヤンツー川（揚子江）

ホワン川（黄河）

と書いてあるからである。そうか、国語審議会が始めたことだったんだな……。さらにそこには、

ただし、黄河・揚子江に限って、ホワンホー・ヤンツーチヤンと書いてもさしつかえない。

という注記がある。「ホワンホー」に「ヤンツーチヤン」では余計にわけが分からないのではと心配になる。もっともこれは、後の昭和三十三年発表の文部省『地名の呼び方と書き方』（発行は昭和三十四年）では、「黄河」「揚子江」と書くように定められているのだが。

さて、もしもこの「ホワン川」という表記が、河川名は「固有名詞＋一般名詞」[10]で表記するということを意図したものならば、言い換えれば、西欧の「テムズ川」「セーヌ川」「ライン川」「ドナウ川」と同じやり方で「〇〇川」とするというつもりであるならば、実は「黄河」を「ホワン川」とするのは間違いなのである。なぜなら、「河」という漢字はまさにあの川の名前だからである。つまり、「黄河」においては「河」こそが固有名詞であり、「黄」は形容詞もしくは接頭語に過ぎないのだ。だから固有名詞部分をカタカナにするのなら、「黄ホー」としなければならないのである（笑）。

一方「長江」は、「長江」ではなく「揚子江」という名称に従っている。これは時代的に仕方がなかろう。その頃は一般に「揚子江」と呼ばれていたのだから。ただ黄河と同様で、「揚子江」を「揚子川」と言うのはやはり変である。

ところが、これはあまりに変だったためか、さすがにその翌年の『新詳』32／33では、

ホワン（黄）河

ヤンツー（揚子）江

に表記が変更される。「河」「江」の字を戻したのはさすがだが、まあ大同小異。ところで非常に気になるのだが、「ホワン河」「ヤンツー江」と書いて、口に出して読む時には、これをどう読ませるつもりなのだろう。「ほわんが」に「やんつーこう」と読めとでも？ それとも「ほわんがわ」に「やんつーがわ」だろうか？「河」が「かわ」なのはまだしも、「江」を「かわ」と読ませるのは子供にはかなりきついのでは？ まさか「やんつーえ」ではないよね？

さらに面白いのは、その次の『新詳』34／35で、

黄河

揚子江

と普通の漢字に戻ってしまっていることだ。さすがにそれまでの表記があまりに珍妙だったと気づいたのだろうか、あるいは単に文部省の『地名の呼び方と書き方』を受けてのことだろうか。それにしても、何を右往左往しいるのだろう。

この「黄河」「揚子江」の表記は『標準』『新詳』47／48まで、すなわち昭和四十七年まで続く。まともな時期もまあ長かったのである。それがその次の『標準』『新詳』50／51では、

黄河（コウ）
長江（チャンチャン）［揚子江（ヨウス）］

となる。一体これは何事だ？「黄」のルビは音読みで「コウ」、「揚子」のルビも音読みで「ヨウス」。ところが長江だけ「チャンチャン」とカタカナ現地音読みのルビなのである！ 小さい「ャ」と大きい「ヤ」だけは律儀に守っている。おそらく、「揚子江」という表記を現在標準とされる「長江」に変更するというのがこの改訂の趣旨だったと思うのだが、[11] 勢い余って新たに加えられた「長江」だけを現地音にしてしまったのだろうか。

この奇妙な混合表記は53／54まで六年ほど続く。そして56／57から、

黄河
長江（チョウコウ）（揚子江）

に落ち着く。「長江」にのみ「チョウコウ」とルビが打ってある。ところが……

ところがである。現行のH18／19においては、

黄河（ホワンホー）
長江（チャンチヤン）

になってしまったのである。「ホワンホー」「チャンチヤン」はルビではなくカッコ入り。他の地名が「カタカナ（漢字）」であるのとは丁度逆の並びになっている。漢字を前に出してはいるが、読み方は現地音で指定されているわけだ。「○○川」に統一するという当初の文部省の方針は無視され、その前の国語審議会の「表」のやり方に戻った寸法だ。

他の出版社の古い地図はどうだろう。地勢社『高等新地図』28／29は、

ホワンホー（黄河）
ヤンツーチャン（揚子江）

である。チャンは小さい「ャ」で不統一。また東京書籍57／58のように、黄河は「黄河」なのに長江は「チャン川」のものもある。日本書院『高等地図』32／33では、

黄河（ホワンホー）
揚子江（ヤンツーチャン）

で、「ホワンホー」と「ヤンツーチャン」がルビである。ところがその後の『最新高等地図』『詳密高等地図』41／42では

黄河
揚子江

となっている（ルビは無し）。これは帝国書院の動きとほぼ連動していると言ってよかろう。上からの何らかの指導があったのだろうか。

次に帝国書院の中学校用だが、24／25の『The New School Atlas』

以来、『新要社会科地図』『中学校社会科地図』はずっと、

ホワン川（黄河）

ヤンツー川（揚子江）

となっている（一部は「ホワン（黄）川」）。それが32／33で一旦、

ホワン（黄）河

ヤンツー（揚子）江

となった後、40／41では、

黄河（コウガ）

揚子江（ヨウス）（長江）

となる（ルビはカタカナ）。それが49／50で、長江が主たる表記となり揚子江がカッコに入ったのはよいのだが、

黄河（コウガ）

長江（チャンチヤン）（揚子江）

という珍妙な混合表記となり（チャンチヤンのみが現地音表記）、それが55／56で、

黄河（コウガ）

長江（チョウコウ）（揚子江）

となる。H8／9からは、

黄河（こうが）

長江（ちょうこう）（揚子江（ようすこう））

と、ルビがひらかなになるのだが、H13／14からは、

黄河（こうが）（ホワンホー）

長江（ちょうこう）（チャンチヤン）

と、現地音表記がカッコ内に添えられて、現在に至る。これらの改訂は高校用とほぼシンクロしていると見てよかろう。

では小学校用はどうなっているのだろう。これもかなり右往左往している。29／30では、

ホワン（黄）川

ヤンツー（揚子）川

である。それが35／36で、

黄河

揚子江

に変わる。51／52ではなぜか、

黄河

長江（ちゃんちゃん）（揚子江）

のごとく、「黄河」はそのままなのに、「長江」には「ちゃんちゃん」とルビが振ってある。「揚子江」はカッコ入りで書き添えられており、これは高校用の50／51における変更とシンクロしていると考えられる。

その後の54／55からは、

黄河

長江（揚子江）

に落ち着く。現行のH13／14も

黄河

長江（揚子江）

のままである。

さて、歴代の地図帳でこれだけ二転三転していると、教える教壇の

先生方がその都度変更をきちんと把握して教えておられたのかどうか、大変不安である。一方その気になって読めば、こうした変更には、現地音主義へのいじらしいまでのこだわりから来るそれなりの根拠が、その都度存在するらしきことも見えてくる。同時に、その変更を行った人がどの点に固執して、どの点に無知だったのかさえも見えてくるような気がする。

それにこの変動の有り様を見ていると、世代によって習った呼び方が異なるなどという事態が生じないのか、心配になる。幸いにも世間では地図帳のカタカナ表記など無視して、黄河（こうが）・長江（ちょうこう）で通用しているからよいようなものの。

さて以上のように、「万里長城」「大運河」「黄河」「長江」というたかだか四つの表記を歴代の地図帳で比較しただけでも、各社地図帳が昭和三十年代初頭には一斉に中国地名にカタカナ現地音表記を採用していたこと、しかし個々の地名についてはその表記方法が二転三転しているものが多いこと、などが分かって来た。この様子では、今後もただちに安定しそうには見えない。いやむしろ、カタカナ現地音表記はその都度いろいろな事情から常に改訂を繰り返し、永遠に決定版には至らない生きものなのかも知れない。従来の普通の読み方なら一貫した表記と教育が保証できるのに……。結局話はそこに戻ってきてしまう。

そこで次に我々が調査すべきは、そのカタカナ現地音表記の指針となった各種文献である。右で見た「万里長城」「大運河」「黄河」「長江」の例から分かるように、これらの表記は各地図帳が勝手にそれぞればらばらでやっていることでは決してない。どこかでシンクロしているし、また地名の音声面のみを重視する点など、原則は共通している。これに基準や指針を与えているのは何だろうか。それが各種地名表記の手引き書である。

目下私の探し得た関連文献には、以下のものがある。

a、文部省による通達や手引き書

「社会科手びき書　地名の呼び方と書き方」

昭和三十四年二月十一日『官報』第９６３９号付録

『地名の呼び方と書き方

《社会科手びき書》　昭和33年（１９５８）』

著作権所有：文部省

発行者：大阪教育図書株式会社

昭和三十四年二月二十日初版発行　１５７頁

b、aを受けて教科書出版社などが作成した小冊子の類

『文部省発表（昭和33年12月）

地名の呼び方と書き方　抜粋』

全国教育図書　非売品　52頁

『社会科手びき書

地名の呼び方と書き方

１９５８年12月　文部省』

付　中国標準音の書き方

中国地名・人名の書き方便覧

解説

日本書院　昭和三十四年二月十五日　60頁

なお未見だが、同様の文献に、

『地名の正しい呼び方と書き方』

第一法規出版　昭和三十四年四月　46頁

がある。

c、財団法人教科書研究センターによる地名表記の手引き書

『地名表記の手引』

財団法人教科書研究センター編著

ぎょうせい　昭和五十三年十一月三十日　276頁

『新地名表記の手引』

財団法人教科書研究センター編著

ぎょうせい　平成六年四月十日　310頁

aはそもそもこのカタカナ現地音表記の根拠となる重要文献である。bは基本的にaの抜粋なのであるが、そこに付された序文や解説・付録などにはなはだ興味深い記述が見いだせる。cはaの後を継いで、世界情勢の変化を盛り込みつつ、財団法人教科書研究センターが作成した手引き書である。昭和五十三年に旧版が作られ、これを改訂して平成六年に新版が作られ、この新版が現行のものである。これに加えて国語審議会の「中国地名・人名の書き方の表」や議事録等各種記録、内閣告示の「外来語の表記」などを適宜参照しながら、いよいよこれらの文献を読んで行くことにしよう。

（続稿）

※本稿（3）は『文化科学研究』21―1（中京大学文化科学研究所）に掲載予定である。

レポートや聞き取り調査に協力してくれた学生諸君に、この場を借りて篤くお礼申し上げる。社会に出ても、感情にばかり流されず、知的好奇心を失わず、きちんと理性的な判断のできる人間として各方面で活躍してくれることを心から願っている。

注

（1）『文化科学研究』14―2（中京大学文化科学研究所、二〇〇三）所収。

（2）その他にも以下の拙稿を参照されたい。

『と学会レポート　オタク的中国学入門』（楽工社、二〇〇七）所収、「社会（地理）――中国地名・カタカナ表記の怪」

「『ター運河』とは、俺のことかと『大運河』言い……　トンデモ化する社会科教材のカタカナ現地音表記」（『と学会誌17号』二〇〇六）

（3）例えば二宮書店『詳解現代地図』H18／19は「リアオトン」としている。一方例えば帝国書院『新詳高等地図』H18／19では「リヤオトン」のまま。おそらく、いずれ「ア」に移行するものと思われる。なお地図帳の刊年、検定年、使用開始年度については後述。

（4）『【大卒程度】警察官・消防官スーパー過去問ゼミ　人文科学』実務教育出版、二〇〇四、消防官／市役所B・平成十四年度

（5）国語審議会「中国地名・人名の書き方の表」昭和二十四年七月三十日建議、Ⅰの1および2、Ⅱの5。文化庁「国語施策情報システム」

（http://www.bunka.go.jp/kokugo/）による。昭和二十五年には文部省調査普及局国語課で増補した「中国地名・人名の書き方の表（便覧）」が公開されている。

（6）財団法人教科書研究センター附属教科書図書館、東京都江東区千石（http://www.textbook-rc.or.jp/library/index.html）。

（7）同図書館の蔵書ラベルでは、昭和のものは（　）を用い、平成のものは／を用いて表示されている。しかし「検定済年」と「使用開始年度」を示している点は同じであり、また同図書館「教科書目録情報データベース」の書誌情報では一律に／が用いられているため、本稿では両者を特に区別せず、／に統一した。

（8）後述の地名表記の手引き書などには、「万里長城」「大運河」を「ワンリー長城」「ター運河」と書く、という明確な指示は特に見あたらない。地図帳出版社独自の判断なのだろうか。

（9）注（5）参照。

（10）後述の地名表記の手引き書では、これを「固有名詞＋接尾語」とみなしている。

（11）日本書院『社会科手びき書　地名の呼び方と書き方』（昭和三十四年）の［解説］第３の（8）では、

揚子江は資料では「ヤンツー川」または「ヤンツーチャン」である。今回は「揚子江（ようすこう）」というようになったが、中国の現地では、それは「長江」といわれ、中国の地図にもそのように記されている。しかし、今回は中国の呼称より日本での慣用によった。

と記されている。当初は「揚子江」を基本とすることになっていたのだが、昭和五十年頃になって「長江」を基本とすることに改められたのだと思われる。

ちなみにこの解説で言う「資料」とは昭和二十四年国語審議会「中国地名・人名の書き方の表」（もしくは翌年文部省調査普及局国語課による増補版）のこと、「今回」とは昭和三十三年文部省『地名の呼び方と書き方』を、それぞれ指すのだと考えられる。おそらく昭和三十三年の『呼び方と書き方』について文部省が各出版社に説明を行った席上で、昭和二十四年の「表」が資料として配付されたのであろう。